

送別の辞

清水隆先生の退職を記念して

文化学部長 佐 藤 勝 彦

清水隆先生は、一九九七（平成九）年文化学部開設と同時に札幌大学に赴任されました。赴任当時、和服姿の英文学教授は強烈な印象でした。前任校は、静修女子大学（現札幌国際大学）人文・社会学部申請時の学部長として、東京の武蔵野女子大学から赴任されていました。当時の学部・学科申請に伴う業績審査は大変厳しい閑門でした。当時、文部省は政令指定都市への大学の新設や学部・学科の増設は抑制する方向でした。その意味でも文化学部申請には幾つものハードルをクリアしなければなりませんでした。特に文化学部のコンセプトが「比較」だから、比較文学、比較宗教、比較文化など「比較」を冠した研究業績が必要でした。その時の助つ人が清水先生でした。

清水先生は生まれも育ちも江戸っ子、東京は上野の育ち、すぐ裏手に寄席（鈴本亭）があり、幼少から祖母に連れられ寄席通いをしていました。ある時、色恋を演目とする三遊亭圓生が、清水少年を見て「子どもがいるから話づらいな」と言つたというエピソードもあつたそうです。祖父母、両親とも長唄、小太鼓、三味線などそれぞ

れが一芸を持つ江戸文化を継承する環境のなかで育つたので、日本文化に対する造詣は大変深いものがあります。小さい頃から寄席通いをしていた先生は「落語」に関しては隠れた研究者であり、落語家桂文楽、三遊亭圓生、古今亭志ん生親子を高く評価しています。

清水先生の比較文学における英國第十九世紀の作家ジョージ・ギッシングの位置づけについて質問をしたことがありました。清水先生曰く、「比較文学と言うのは、自国の文学と他国文学または、他国文学同士を比較する二種類があり、そこには一対一の場合もあれば、二対二のようにバラエティがある。僕は浅学だから、とてもそこまでできない。日本の場合、比較文学の基本になるのは、夏目漱石と森鷗外なんだが、鷗外と言うのはドイツに長くて、医者であると同時に文学者であり、沢山の作品がある。ところが、これがちょっと難解なこともあります。僕がドイツ語及びドイツ文学を知らないということで、夏目漱石の文学を中心にイギリス文学との比較となつた。」

以下は、清水先生にお話を伺つたときのことを思い出しながらまとめたものです。

漱石は英國に留学したのですが、留学の成果はゼロに等しい。向こうに行つて、何もしなかつた。英語の勉強に文部省から派遣されたわけですから。文学を研究しに行つたわけではない。英語の勉強に派遣され、一年だつたんだけれど、一年じや目鼻がつかない。もう一年、無理して二年間、イギリスにて、その間にノイローゼになつてしまつた。当時日本で、無二の親友であつた正岡子規が死んだことも、彼にとつてショックだつたんですね。それで日本に帰つてきた。

イギリスの留学は、彼にとつて実地の異文化とは関係なかつた。憎しみや蔑みそして自己嫌悪ばかりだつた。彼は英文科出身で、偉い先生についているから英文学とはなんぞや、文学とはどんなメリットがあるのか、研究し

たらどんなことがあるのか、このような観点で彼は取り組んだ。彼が取り組んだのは、十八世紀小説、即ち小説になりかかつてきた頃、小説になる前のダニエル・デフォーのロビンソンクルーソーや、ジョナサン・スイフトのガリヴァ旅行記、そのあたりの研究を一生懸命やつた。彼が一番優れているのは、リアリズムの研究なんですよ。人があるがまま、英語で言うと『as it is』、「今、それがそうであるように」、そのリアリズムの研究をしていた。彼に対しては研究され、色々な言い方をされ、余裕派とか高等派とか、少し高みから人を見下しているとか言われている。僕は彼の小説は、そればかりではなくて、特に中期の三部作、『三四郎』、『それから』、そして『門』がある。

最後に、『こころ』がある。この『こころ』を入れないで、前三部作の『三四郎』は結局大学時代の好きだつた女が自分を裏切つてというか自分を無視して、自分の友人と一緒になつてしまつた。『それから』では社会人になつて、しかし親がしつかりしていく、働くくとも生活で生きるいわゆる高等派、高等遊民でいて、そこへ苦労している彼女の夫婦が連絡してくるわけ。その亭主は彼女に対してもうほんどう情は無いんだけれども、ただこれを返すわけには行かない。主人公の代助は困つているとお金を貸してやるんですよ。ところがそれがスキヤンダルになつてしまふ。当時の社会で、よその奥さんだから、友達が主人公の親父のところへ、手紙を出すわけですよ。親父は烈火のごとく怒る。「おまえが結婚しないのはそのためか?」と。勘当だ、これから一切の生活保護はしない、といふことで終わる。

三作目の『門』になると、こんどはその奥さんが逃げてきて、その主人公と一緒に暮らすことになる。主人公は今まで働いたことがないんだけれども、食べるため働くなくてはならないから、しがないサラリーマン勤めをしているわけですよ。そこへ元亭主がきて、なにかと嫌がらせをする。生きている間、あいつをおまえに絶対渡さない

いという。そのあたりの三角関係、これが漱石の本質だと僕は考える。彼自身は文学者だから、女性に対する好みはあつたんだろうけど、漱石の奥さんと言うのがすごい奥さんで、いわゆる恐妻、猛烈なやきもち焼きで、漱石自身もほとほと手を焼いていて、結局観念の世界で遊んでいたわけ。四十九歳で胃癌で死ぬわけですが、そんな意味で、僕は漱石はリアリズム作家だと思っている。リアリズム作家研究と言うのが、僕のやっている英國の文学の本質なのですよ。十九世紀、このリアリズム小説をはじめて書いたのがジエイン・オースティンという女流作家なの、これがなんと漱石より百年前、一八〇〇年頃なんだ。漱石が良い作品を書いたのが一九〇〇年頃、百年差がある。この百年の間に英國のリアリズム小説というのがものすごく発達してきている。その中間を通り越して、一九世紀の後半、漱石に近づいた頃に、ギッシングという作家がいた。これが、リアリズムの塊りのような人。リアリズム小説とはこのようなものだ、という一二の長編を残している。それが僕のメインの研究対象なのです。

比較文学をどのような観点で切るのかというと、リアリズム小説という観点でみると、漱石とオースティン、漱石とギッシングという比較文学が成立つと思う。

小説にはいろんなジャンルがあるが、僕は小説の本質は飽くまでもリアリズムだと思う。もつと端的に言うと人間を書くということ。人間を書かないものは小説ではない。怪奇小説とか空想小説とか、旅行小説などは小説にならないと思う。人間を書く小説家は日本には腐るほどいる。漱石以降で傾倒したのは、永井荷風ですよ。これは女しか書かない。僕も助平だから、女を書いていることにものすごく共鳴する。荷風が発見して弟子のような関係になつているのが谷崎潤一郎、これもまた女しか書かない。この二人がまさに日本の大正昭和のリアリズム小説家だと思う。それとつなげて考えていくと小説の本質というのはそういうところにあるのではないかと。

ギッティングという人は自身が大変苦労した人で、若い頃は囁きされた優秀な研究者として歴史家を希望していたが、これが女で躊躇。ロンドンの大学に入学したときに、寂しさで、親父は薬剤師であり金が無くて、本人もお金が無いんで、困っているところで街に出たら、いわゆる娼婦と付き合ってしまう。娼婦には金がかかる。その金の工面に大学の更衣室に行つて、金を盗むしかしようがない。これで捕まつて、当時、一ヶ月投獄される。出てきて社会に認められなくて、アメリカに渡り二年を過ごす。アメリカで放浪生活をする。その間にあることが無いものだから短編を書き出した。帰ってきて、一生懸命努力をして、ある程度社会的地位を得ていくのですが、その間に、帰ってきたら前の彼女（娼婦）に責任を感じてしまつて、人間として面白いやつでね、これを正式に奥さんにして。この娼婦と言うのが悪女の塊りみたいなやつで、平気で酒は飲むは男遊びはするはで、もうこてんこてんになつてしまふ。どうしようもなくなつていた頃に、やつと死んでくれたわけ。その後、それに懲りれば良いのに、しがない靴屋の娘と一緒になつてしまふ。これがまたとんでもない悪妻。そこで大いに苦労するわけですよ。これがまさにリアリズムね。浅ましい男、最後は理想を持つて自分の長編小説をフランス語に翻訳してくれた翻訳者がいるわけ、その女と結婚、これがフランス人ですから食い物から全てフランス式でないとダメ、おつかさんがいるんだけれど、イギリスになんか絶対住まないという。しかたなく本人は彼女と一緒にフランスの片田舎ピレネ山麓の小村に行くわけですよ。そこで死んじやう。

女を書くということ。男はあらゆる意味で女を意識する。そこにリアリズムがある。世間で、おれは女が嫌いだというのは嘘。それを表に出すか出さないかの違いで、女を意識しない男はいないといえる。程度の差こそあれ、そこの人間の真の姿があり、その姿を描くものが真の小説である。それがリアリズムである、という繋ぎ方をしま

すかな。

清水先生は、今年三月で定年を迎えられます。学部開設から関わっていただき、今後の文化学部の行く末も案じられていることと思い、お話を伺いました。

おおげさなハードのことは別として、ソフトな面で言うと、読書することを考えるべきだと思う。全ての学生を対象として、例えば現行の入学前カレッジ、何か一つを読ませる。それをもう少し発展させて、できれば、一、二年生くらいまで、読む週間をつけさせる。今の学生はただ読めといつても読まないので、何かの形で単位化するとか。義務化するとか。本を読まない、常識も無いくせに、ゼミで高級なことを叩き込まれる。ぜんぜん地に足が着かない。現代の小説も読んでいないのに、源氏物語の話をされても、無理でわからない。

外国文学などの作品をとことん読ませるわけです。今のは読まない、あらすじで読む世界文学など、あらすじを知識として満足している。上つの簡単なものが出てきている。原文を読まずに、ただ切り貼りして（卒業論文など）壮大な印刷物を作り上げている。日本文学もそうだがシェイクスピアも同じ、イギリス文化論でシェイクスピアのヴィディオを見せるとハムレット初めて見ましたという学生もいる。この講義で三週間、シェイクスピアなどの代表的な文学作品を通して文学の生き立ち（文学史）を講義した後、十一項目（左右の線結び）問題を出題する。恐るべきことに、四、五年前だと十一項目全部できる学生、九、十項目できる学生が可なりいたが、三年くらい前から、一番できるのが九項目くらい、ゼロという恐るべき学生もいる。自分の無力に自信を失ってしまう。馬を川べりに連れて行くことはできるが、水を飲ませることはできない。十一あって、ゼロですよ。今年はほんとに

ひどい。この状態をみると、「読み書き」が基本ですね。学ぶこと、人の話を聞くことの作法を知らない。学び方を学んでいないと言える。即ち学び方を教えることがこれから課題だと思う。例えば、国語の教師にちょうどする学生に読書習慣がないというのは大きな問題です。今の四〇代、五〇代の国語教師にも読書習慣のない教師が多いとの報告がある。悪循環です。このままいくと、日本の教育がダメになってしまいます。現行の国語の学習指導要領で「読み・書き」より「聞く・話す」に力を入れている（四領域時間配分）。とんでもない間違いである。コミュニケーション重視の政策は、英語教育でも同じで、「聞く・話す」に力を入れている。「読む・書く」という英語の基本を忘れている。大いに苦言を呈したいですね。まず英語を必修ではなく、国語を必修にしたほうがよいのではないかとすら思います。

インターネット時代では、外国人に会つて会話をするチャンスより、ネットで外国語に出会うチャンスのほうが多くなり、ビジネスでも「読み」の力が必要になってくる。

これから教育の基礎は、「読み・書き」をしつかり教えるソフトの充実が社会から期待されているのではない

かと思います。

清水先生と話していて、いつも驚かされるのは、大変な読書家であり、絶えず研究の成果を学会誌等に公表され、これを若いことからたゆまらず続けられていることと同時に、日本文学に関する造詣が深いことです。評論と言ふことではなく文学そのものを楽しんでいる、いやもつといふとそこに登場する人間模様を深く掘り下げ、人間の生き様をリアリズムの視点から鋭く分析する。特に女性に関する洞察は天性のものかと、大いなる誤解をしてしまうほ

どの深い分析なのです。

定年後は引き続いて学部教育へのお手伝いをお願いしておりますが、幼少からの落語研究で私たちに新しい日本文化の眼を育てていただきたいと切に願い、送別の辞といたします。